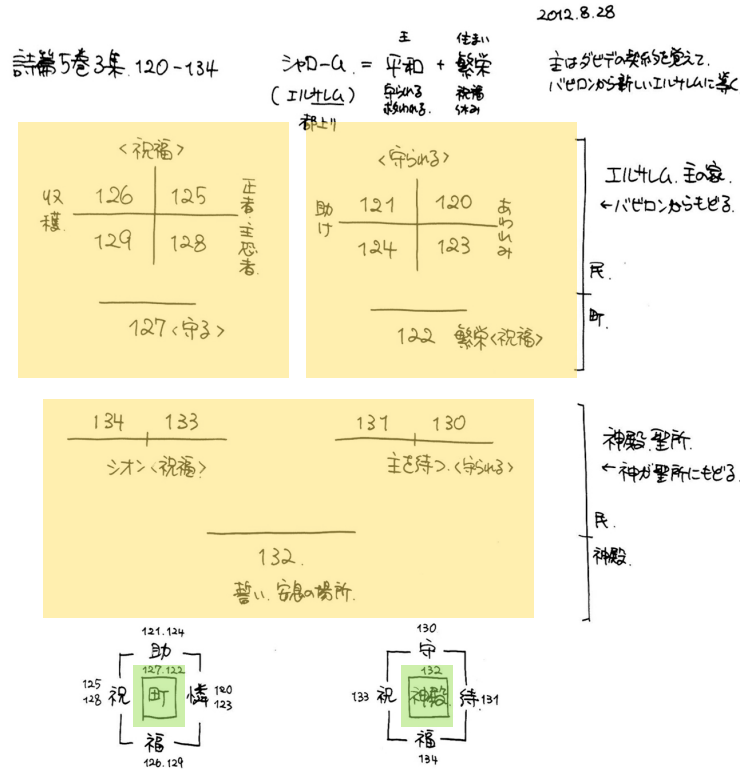




詩篇第5卷第3集 詩篇120-134篇の配列構造 「都上りの歌」



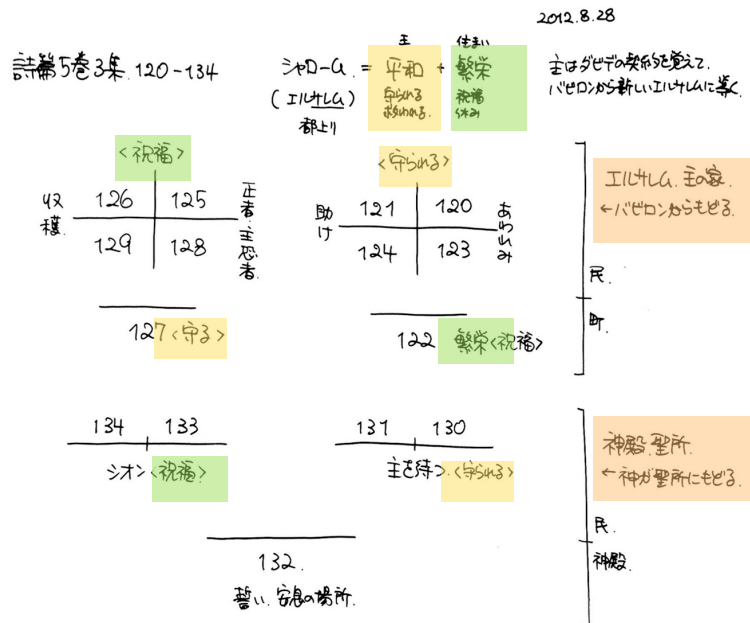
詩篇第5卷の第3集。120篇から134篇の15篇です。都上りの歌という題がつけられています。119篇は特別な詩篇だということはわかりますから、120篇から始まります。135,136篇あたりは、120からの都上りに似ていますが、次の段落の出だしになっているということで、この都上りの詩篇の15個がどういつながりになっているかを分析しています。

132篇は別にビデオを撮りました。長さもこの中で一番長くて他の詩篇の倍くらい(あります)。132篇は、ダビデの契約の成就ということで、ダビデが誓う、主が誓ってくださいという第2サムエル7章と第2歴代誌6章のソロモンの祈りというもので構成されています。

都上りの歌の特徴は、繰り返しの言葉がはっきりわかるような形で書かれています。言葉とフレーズがここここ、あそこここということがわかるような書き方がひとつの特徴です。そして、ひとつひとつがあまり長くなくて繰り返しの言葉や言い方があります。それから、エルサレム、シオンという言葉もたくさん出てきます。これらの段落をどう分けられるかというのを見てきました。

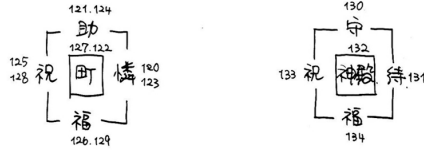
5つずつに分かれているだろうと(考えられます)。繰り返しのところに色を塗って、例えば、「私たちの助けは天地を造られた主から来る、主の御名にある」や「イスラエルの上に平和があるように」「～さあイスラエルは言え、また～」のような言い方など、同じようなフレーズと言葉を見て考えると、特に120篇から124篇の真ん中の122篇、

125篇から129篇の真ん中の127篇、130篇から134篇の真ん中の132篇。この真ん中のところが他と違って、4つの物の真ん中の詩篇が特徴があるものだと思います。



基本的に120篇から134篇はシャロームについて教えてくれています。エルサレム、エルシャロームの祝福がどういうものかという、平和、守られる、救われる。敵から守られ救われるということと、守られて平和が保たれているので繁栄する、祝福を得る、住まい休みが与えられるという平和と繁栄がシャロームを表していると思います。その守られることと主を待つこと、祝福をされることと繁栄することと祝福されること。この130篇の中に夜回りが待つのに勝りというのがありますが、ここも夜回りが守るというような言葉でことで守られるということになっています。守られる(120-124)、守られる(127)、守られる(130,131)。祝福される(125-129)、祝福される(122)、祝福される(133,134)。この中では両方です。王座に座ることと民が特に祭司と聖徒という言い方で民の喜びが表されています。この守られることと繁栄の全体の構成で都上りが成り立っていると思います。

最初の10個、5個ずつは、特にバビロンからエルサレムに戻ってくる、町に戻ってくる、町が再建されるということ。130篇からのところは、神様の神殿に神様が戻って来る、神殿が立てられてそこに主が戻ってくるということで、エルサレムに民が戻っていくことと、神様が聖所に戻って来てくださるということです。130篇から134篇の4つは、聖所やアロンが出てきますので、神殿の話だということがわかりますけれど、130篇131篇は(直接出てこない)神殿の話なのかなと思うかもしれませんが、ここに書いてある「心と目」というキーワードを見ると神殿のことだとわかります。私たちの心と目はあなたに向いている、神様の心と目は神殿にあるというようなことからわかると思います。エルサレムに戻る、民が戻る、町が再建される、民が祝福されて神殿が再建されるという全体の流れになっていると思います。



ちょうど4つと1つが囲われているような形になっています。回りに4つの詩篇があつて真ん中、回りに4つの詩篇があつて真ん中というように、守りと平和と繁栄で町が祝福されている(120-129)。守りと祝福で神殿に栄光が現されている(130-134)というのがこの第5巻第3集です。主はダビデの契約を覚えてくださって、バビロンから新しいエルサレムに導く、新しい神殿、新しい時代が来るといふシャロームの祝福を歌っているのが第5巻第3集ということになると思います。